

発達障害とトラウマ反応の判別の一例

— 青年期を迎えた被虐待児の心理査定から —

The differential assessment between Developmental disorder and Traumatic reactions.

— An analysis of psychological inventories of an adolescent abused woman —

堀 琴 美*

Kotomi Hori

Abstract

This study was an analysis of the personality tests of a female university student, who has been brought up in an abusive family since childhood, and was diagnosed with Developmental disorder in elementary school age. The test battery was Rorschach test and PF-study.

The result was, the student had very few common points with Developmental disorder's features, and she was considered as Reactive attachment disorder, instead. Through the growing process, the student's psychological feature was inferred to change appearance from Reactive attachment disorder to Complex-PTSD.

The differential diagnosis between Developmental disorder and Traumatic reactions is difficult, generally considered, only by seeing their symptoms. But there should be some differences in potential abilities or psychological features, even if the symptoms are very similar.

はじめに

虐待を受けた子どもに見られるトラウマ反応と、その後の心身の発達に及ぼす影響については多くの研究が行われているが、中でも発達障害との鑑別の難しさが指摘されている^{1,2}。

あいち小児センターで「子育て支援外来」を務めた杉山によると、子ども虐待症例の中には、広汎性発達障害(自閉症スペクトラム、以下ASD)が24%、注意欠陥性多動性障害(以下、ADHD)が20%存在し、さらにその他の発達障害をふくめると実に54%も存在しているという。この発達障害群では知的障害のないものが9割を占めることから、軽度発達障害は虐待の高い危険因子であると杉山は指摘する³。また、虐待を受けた子どもの多数の症例から見てきた共通点として、多動性行動障害を呈するものが非常に多く、衝動コントロールが不良で、些細なことでけんかになるかフリーズを起こし、予測を立てたり、整理をしたりすることが著しく不得手な子どもが多いことを挙げている。これらの行動特徴は、ADHDに非常によく似ている

* 人間生活学科

が、ADHDではないと杉山は明言する。

つまり、発達障害をもつ子どもは虐待を受けやすく、虐待を受けた子どもは発達障害とよく似た症状や行動特徴を示すのである。しかし実際には、一般の病院で子どもが診察を受ける際には、虐待の既往が報告されることはあまりない。親が自らの加害・虐待行為を告白することは極めて少ないからである。そのため多くは発達障害と診断されることになる。

大学生で発達障害の診断を持つ者の中には、虐待的な環境での生育歴があり、かつ発達の偏りが診断名とは異なる様相を示す学生が時折みられる。発達障害とトラウマ反応は、症状が同じであっても、潜在する能力や心理的特性に違いがあるはずである。ところが、発達障害と診断されると、自分の生きづらさや苦しみの原因が生まれながらに持つ中枢神経の障害にあると認識してしまう。大学生にもなると、自分で調べた発達障害の特徴などの固定概念にも影響を受けて、ますます発達障害様の行動特性を固定化させようとする者も出てくる。例えば、他者の感情を受け止め共感する能力を十分に持ちながら、その努力を放棄しようとしたり、「自分は特別な存在である」という意識を正当化して、クラスメイトとの共同作業などで社会適応の努力をしなくなる学生がいる。そうした学生への支援には、その人の抱える問題が発達障害によるものかトラウマ反応によるものかを見分けることが重要なポイントとなってくる。

そこで、発達障害とトラウマ反応の鑑別の材料を探るために、児童期から注意欠陥性多動性障害(ADHD)と診断されていた大学生女子の事例を取り上げ、その心理分析を試みる。子どもではなく大学生の、症状ではなく人格特性に着目し、比較的言語的データの豊かな事例を検討することによって、発達障害とトラウマ反応の違いを見出すことを本研究の目的とする。

1. 研究方法

ロールシャッハ・テストとPFスタディを用いた心理検査の結果を分析し、被験者の反応の特徴がASDやADHDなどの発達障害の特徴とどの程度共通点を持つか、あるいは相違点があるかを検証する。特に、被験者の人格特性や潜在能力についての再評価を試みるとともに、発達障害と虐待等によるトラウマ反応の鑑別点を探る。

1) 人格検査の概要

① ロールシャッハ・テスト

ロールシャッハ・テストは、インクのシミの図版が「何に見えるか」を問う投影法の検査である。人格検査の中でも、無意識レベルの深層心理を理解するのに役立つとされるメソッドで、被験者のパーソナリティや病態水準を評価することができる。本研究では、片口法⁴による解釈と評価を行った。

②PFスタディ

絵画欲求不満テストとも呼ばれる投影法的人格検査⁵で、欲求不満場面におかれた時の反応タイプ(外罰型、内罰型、無罰型、障害優位型、自己防御型、欲求固執型)から人格の傾向を把握するものである。

2) 倫理的配慮

本研究のために、Kさんに学生相談室における心理検査記録と分析結果および相談記録の一部を開示させていただきたいとお願いをした。これに対して「匿名で、私の情報が特定されないようなら問題ありません。むしろ先生の本に書かれている論文は、これから未来の私のような子どもたちや、かつて子どもだった人たちのためになると信じていますので、ぜひお願いしたいです」(原文ママ)という返信をいただいた。Kさんは、卒業後も折々に本学に立ち寄り、近況報告をしている。現在は問題なく就業を続けており、心身の状態も学生時代より改善しているようである。そこで、本研究による情報開示がKさんの健康に悪影響を及ぼす可能性は低いであろうと判断して、事例として取り上げることにした。

3) 事例K

来所当時は大学1年生、女性。

家族構成は、両親と本人の3人。同胞なし。Kは幼稚園の頃から大声で騒ぐ多動な子どもであった。それに対し「親もヒートアップするので、ある一点を超えたときに痲癩を起こしていたのだと思います」(本人談)。母親は「こういう子どもを持っているのは辛い」と何度も包丁を持って追いかけてきた。そうした騒動の後には「体を動かすのが辛く、できないことも多く、自分でも面倒くさがっている、なんでできないんだろうと思う中で、親に責められていた」(本人談)。

小学1年生のときにADHDと診断され、小学3年生頃にはアスペルガー症候群の診断が追加された。小、中、高校ではいじめを受けた。親にも教師にもよく叱られた。大学はいじめを受けない初めての環境だと喜んでいたが、そんな中でもうつ状態や希死念慮、勉強を頑張らなければならないという強迫観念は常時あった。「自分をいじめたい」という衝動があり、ダイエットのための過食嘔吐も始まって、不眠・不調の訴えも多かった。「お母さんに甘えたい。でも、そうしてもらえない」。母親は娘の不調に気づかないが、本人は多忙で疲労気味の母親を気遣っていた。父親のことは「威圧的で高圧的。母の話をする『俺のほうが疲れている』と言って取り合わない。父との距離は縮まらない」と表現していた。

大学3年生の時に、「あなたは手先も器用だし、アスペルガーらしくないね」と言うと、「私は愛着障害かもしれない」という答えが返ってきた。その数日後、携帯電話を紛失し「父に叱

られるのが怖くて家に帰れない」という出来事があり、「父も母も私を庇ってくれることはない。2人は私を叱るときだけ結託するんです」という話を始めた。

以後、両親から受けた責め、叱責、暴力、暴言、脅迫の数々を「何度もぐるぐる思い出して」、希死念慮や両親への復讐心に苦しみながら、卒業まで辛い日々を過ごした。うつ状態が続き卒業研究の完成が心配されたが、指導教官らの精神的サポートを受け、最後の踏ん張りで論文を書き上げて卒業した。

2. 心理検査結果の分析

1) ロールシャッハ・テスト

Kのサマリースコアリングテーブルを表1に示す。

表1 Kのサマリースコアリングテーブル

R	58	W : M	23 : 10	H%	31%
Rej	0	M : ΣC	10 : 8.5	A%	45%
R 1 T (Av)	4.9"	FM+M : $Fc+c+C'$	5 : 1	At%	0%
R 1 T (N.C)	6"	VIII+IX+X/R	29%	P (%)	6 (10%)
R 1 T (C.C)	3.8"	FC : CF+C	5 : 7.5	C.R.	9
W : D	23 : 23	FC+CF+C : $Fc+c+C'$	12.5 : 4	D.R.	6
W%	40%	M : FM	10 : 4	修正BRS	12
Dd%	40%	F% / $\Sigma F\%$	57/91		
S%	10%	F+ % / $\Sigma F+ %$	79/77		
Delayed Card	I, 17"	R+ %	71%		

【量的分析】

反応数(R)は58個と多く、平均(25個)の倍を超え、また通常の反応数(20～45個)の範疇をも超えていることから、もともとの心的エネルギーは高く、また検査に対する意欲も高かったのであろう。反応の量と質からみた大まかな分類では、Aゾーン(反応数大、形態質良好、正常成人の多くがこの領域に含まれる)にあり、観念活動が活発で想像力に富む人である。修正BRSは12であるから、適応域の中でも得点の低い「神経症的傾向」を示す群、もしくは葛藤域の「不安神経症」群に近い数値である。

体験型(M : ΣC)は、10 : 8.5と、「両向的体験型」に近い「内向的体験型」(Mのほうが多い)である。両向的も内向的も、どちらも正常者の反応型であり、ともに豊かな感受性と創造性を有しているが、Mの多い内向型のほうがより分化した知能と安定した情緒を持つと考えられている。これに関連する指標FM+M : $Fc+c+C'$ は本人が認知していない潜在力を示すも

のであるが、ここでは5:1と体験型よりもさらにはっきりとした内向的傾向が表れている。色彩図版の反応割合(VIII+IX+X/R)は29%で一般的な反応の範疇にあり、外的な情緒刺激に対する感受性が自然な形で表れていることを示す。

知的側面に関しては、形態水準を示すΣF+%が77%であり、正常者の平均(77.6%)の数値である。また、公共反応(平凡反応)Pの出現数も6で、反応数の多さに比べるとやや少なめではあるが、一般的な範疇(5あるいはそれ以上)には入っている。したがって、この人は現実吟味と、判断の公共性や適切さを有する人である。さらに、知的側面と関係をもつW:Mは23:10であり、好ましいとされる2:1に近い割合となっている。

一方、情緒の統制については、FC:CF+Cが5:7.5で、外的統制の弱さ、すなわち自己中心的で統制を失った行動を示す傾向がみられる。FC+CF+C:Fc+c+C'は12.5:4と偏りがあり、色彩反応で示される快的な感情あるいは積極的感情が強く、抑うつ気分が少ない状態にあるようである。

【反応内容】

この人の反応内容の第一の特徴は、優秀水準+が5つも存在することである。その意味は、平均以上の知能、行き届いた注意力、優れた独創性、豊かな想像力などである。表2にその反応内容を示す。

表2 Kのロールシャッハ反応の特徴(1)

優秀形態+のプロトコル

No.	Position	Free	Inquiry	Score
II	V	②ファイアーダンス	これは人です。多分、男の人。頭をかかっているシルエット。肘、膝、膝蹴り的な。(なぜファイアーダンス?) 赤いところ、こちら辺が飛んでいるから火に見える。	W, M+, CF, m, H, Fire, P
III	^	②フォーマルな感じの食事会	低いけど、ここが食卓でテーブルクロスでも敷いてありそうな、テーブルクロスは見えていないけど、そんな感じのテーブルに見える。ここに人が見える。ハイヒール、スーツ、頭。テーブルがあるから食事会。	W, F+, H, Obj, P
VI	V	④ライオン	耳、タテガミ、鼻のモフモフ、口。真ん中の白っぽいところが顔。その外側はタテガミで、とがってギザギザしている。	W, F+, cF, FC', Ad
	<	⑤上空で撃たれた鳥が湖面に落ちて水しぶきを上げた。水鏡です。	クチバシ、顔、首、羽のようにみえるところが水しぶき。上空で撃たれて、落ちてきて、水しぶきが上がった。水鏡です。ここに水平線がある。	D 1, FK+, Fm, m, A, Lds
VIII	^	①サーカス	全体的に見て、サーカスの外観。屋根があって、ここが派手な幕で、動物のバルーンアートがここにあって、材質はわからないが、何かの動物。ここが顔で、手足があって、しっぽがある。色もカラフルでにぎやか。	W, FC+, Arch, (A), Obj

IIカードの「ファイアーダンス」とIIIカードの「フォーマルな感じの食事会」は、ともに、一般に「人」の公共反応Pが多く出る領域から発想が発し、周囲に見えるものをまとめ上げて、全体の構成にまで進めている。IIカードでは躍動的なM+反応が登場しており、これは知性の高さを示唆するものである。VIIIカードの「サーカス」もD 1領域を「動物」とみる公共反応Pからの発想のようであるが、全体反応Wに失敗しやすいVIIIカードにおいて、部分の明細化と全体構成の両方に成功している。VIカードの「ライオン」は、反応の出にくい領域にも注意深い観察を行い、納得のいく形態を見つけ出したと推測される反応である。VIカードでは、インクの陰影から「毛皮」を見出す人が多く、これが公共反応Pとされているが、その毛皮の感触（「鼻のモフモフ」）を発展させてライオンの顔を見つけ出している。さらに、秀逸で稀有な反応（O反応）に近いと思われるのが、VIカードの「上空で撃たれた鳥が湖面に落ちて水しぶきを上げた（水鏡）」である。ここには、三次元的知覚に基づく通景・立体反応FK（水鏡）や、非生物運動反応m（水しぶき）など多様な決定因（副反応）が含まれており、おそらく最初に認知した「鳥の姿」と周囲にみえた形態とを統合して、情景的ストーリーを作り上げている。

一方、健康的ではない反応特徴としては、前の反応をひきずり、同じ領域にほとんど同じものをみている反応や、領域を変えて異なる形態を見ていても同じ内容の反応を与える傾向がみられることである。表3にその反応表を示す。

表3 Kのロールシャッハ反応の特徴(2)

反復・固執を示唆するプロトコル

No.	Position	Free	Score
I	△	①墮天使	W, F±, C' F, (H)
	>	④天使	D 2, F±, (H), Cloths
II	△	①ダルマが踊っている	D 1, M±, (H)
	▽	②ファイアーダンス	W, M+, CF, H, Fire, P
	△	③中東の油を入れる瓶	S, F±, Obj
	△	④お祭りの祭壇	W, M±, CF, H, Fire, P
	▽	⑤武踊、神に奉納する踊り	W, M±, CF, H, Fire, P
III	▽	①蛙の顔	W, F±, Ad, Obj
	▽	②蛙の顔	dr, F±, Ad
	▽	⑦モアイ像	dr, F±, (Hd)
	▽	⑩紳士がタバコを吸っている	dr, M干, Hd, Cloths
VI	▽	③お花	W, F干, Pl
	▽	⑥花を2つに切断した絵	W, F干, Pl
VII	▽	③おじいさんが2人	D 2, F干, H
	▽	④きのご雲	S, F干, Cl
	△	⑤おじいさんがうなだれている	D 4 + 5, M干, H
IX	<	⑥おじいさん(絵本の中の)	D 1, F干, (Hd)

表の上に記した白抜きの矢印は、異なる領域や図版に対して同じ内容を繰り返し与えている反応である。Ⅰカードの「天使」と「墮天使」、Ⅱカードの「ダルマが踊っている」と「ファイアーダンス」、Ⅲカードの「蛙の顔」(①と②)、Ⅶカードの「おじいさん」(③と⑤)は、それぞれ図版の中で視線を移動し、前に見ていた領域とは異なる場所を見ているのだが、そこに前と同じ答えを与えている。また、黒色の矢印は、前に見ていた領域からいったん目を離すが再び同じ領域に戻ってきて、ほとんど同じものを見て、説明だけを変えている反応である。Ⅲカードの「モアイ像」と「紳士」は同じ領域に見えている横顔であるし、Ⅵカードの「花」も一つ目の反応に工夫を加えて2つ目の反応をひねり出したものであろう。

こうした反復の頻回な出現は、物事への固執傾向や、切り替えの悪さを示唆すると考えられている。ある感情を抱くとそれに囚われてしまい、いったんは距離を置こうとするも失敗し、もとの状態に戻ってしまうのである。Ⅶカードの反応(③④⑤)は、それを説明しやすい例である。③「おじいさんが二人」という反応は、形態質の悪い人物像で、第三者は説明を受けてようやく「人」の姿を見ることができるのだが、それはひどく醜い姿であった。被験者はいったんそこから離れて、次に空白領域に④「きのこ雲」を見るのだが、これも形態のあいまいな不良(干)反応である。そして、また別の領域に形態質の悪い⑤「おじいさんがうなだれている」姿を見出してしまう。ここに気分の切り替えがうまくできずに陰性気分に固執する被験者の姿が垣間見える。なお、Ⅶカードは「母親カード」とも言われており、図版の印影に柔らかなぬくもりを感じている材質反応cが一般に多く出るカードである。しかし、この人の反応にはそれがなく、代わりに陰鬱な姿をした「おじいさん」が2度現れてⅦカードを終えている。ここに、愛着に関連する抑うつ気分の存在が窺われ、その問題を解決できずに抱え続けていることとの関連が推測される。

だが、固執と反復の傾向は、悪い方面に作用するばかりではないだろう。物事への執着は、粘り強さや積み重ねにも通じる心的エネルギーである。被験者はⅡカードで最初に「ダルマ(人)が踊っている」姿を見出だし、次に別の領域に着目して「火」を付け足し2番目の反応「ファイアーダンス」とする。3番目の「油を入れる瓶」と4番目の「祭壇」は、一見これまでとは距離をおいた反応のように見えるが、被験者の中では、これらも内的に維持し続けた「ファイアーダンス」の道具の一部だったのである。そして、最後にそれらをすべてまとめて⑤「神に奉納する踊り」と名付けてⅡカードを終える。見出した材料をバラバラにしたまま終わるのではなく、固執による反応プロセスによって、ひとつの情景が見えるストーリーが形成され、結果として良質な反応(土)となった。

2)PFスタディ

Kのプロフィールを表4に示す。

表4 KのPFスタディのプロフィール

PFスタディプロフィール ()内は一般の平均値と標準偏差
GCR=50% (58, SD=12)

E-A	28% (36, SD=13)	<u>E</u>	2% (4, SD= 3)
I-A	46% (31, SD= 7)	<u>I</u>	4% (8, SD= 5)
M-A	26% (33, SD= 9)	<u>E+I</u>	7% (12, SD= 5)
O-D	41% (24, SD= 9)	E-E	2% (16, SD=11)
E-D	39% (55, SD=10)	I - <u>I</u>	20% (11, SD= 5)
N-D	20% (22, SD=11)	(M-A) + <u>I</u>	30% (41, SD=10)

【プロフィールの解釈と分析】

反応の集団一致度を示すGCRは50%である。これは平均(58%, SD=12)に照らすと低く、「欲求不満は正常のものとは言えず、社会適応性は低い」という評価が下される数値である。Kは、ロールシャッハ・テスト結果では平均かそれ以上の知能が示唆されており、言葉を使って状況を説明する能力を十分も持つ人である。しかし、現実の欲求不満場面においては、自己を十分に表現できず、常識的な受け答えをしたり、一般的な方法で問題解決をすることがうまくできないようである。

攻撃方向におけるもっとも大きな特徴は、内罰的傾向(I-A)が46%と高いことで(平均31%, SD=7)、特に内罰的欲求固執型(i)が3.5% (平均1.4%, SD=1.0)と他の特性と比べても群を抜いて高い数値を示している。これは、欲求不満の原因を自己に求め、攻撃の方向を自己に向け、自分の努力によって解決しようとする反応で、人一倍罪悪感を強く抱く人である。一方、外罰型自己防衛(E)の反応は目立って低く、咎めや敵意を外に向け、自我を強調することができないばかりか、社会に適応するために必要な適度の攻撃性さえ出すことができない。反応の型は、障害優位型(O-D)の反応が41%と多く(平均24%, SD=9)、問題を起こした障害そのものを指摘する傾向が強い。その場合は、感情を抑圧して攻撃を表さないか(M'=3.5%, 平均2.0%, SD=1.1)、または、障害にうちのめされ単なる不平不満に終始する(E'=4.5%, 平均2.1%, SD=1.4)タイプである。

超自我因子は、外罰型、内罰型のいずれも低く(E=2%, 平均4%, SD=3) (I= 4%, 平均8%, SD=5)、自己防衛力の弱い人である。また、社会性や精神の発達の指標である(M-A) + Iも30%と低く(平均41%, SD=10)、自分や他人を弁護する傾向があまりみられない人である。

3. 反応特徴における発達障害との照合

1) 人格の統合水準

Kのロールシャッハ・テストにおける修正BRS (Basic Rorschach Score) は12で、適応域の「神経症的傾向」群もしくは葛藤域の「不安神経症」群に位置する数値であった。一方、辻井らの研究では、高機能広汎性発達障害の修正BRSの平均は-30.31とかなりの低値を示し、現実喪失水準とされる-30以下の者が50%を占めた。これは、統合失調と見間違える危険性のある数値であって、詳細なプロトコル検討が必要とされる。また、高機能自閉症の場合は、統合失調と同様の思考障害がみられることも分かっている⁶。

これに対し、Kの反応には現実吟味の喪失や思考障害を示す反応はなく、修正BRSからみたKの人格統合水準は高機能広汎性発達障害群の水準とはかなり離れた領域にあることが分かった。

2) ロールシャッハ・テストにおける量的分析の照合

日本での高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応の研究をまとめた明翫のメタ分析によると、その特徴として①反応数が少ない(8~20個)、②W反応が多く、全体を単一概念として把握しようとする傾向、③形態のない漠然反応の出現、④現実的・全体的な人間反応が見られない、⑤固執傾向、⑥濃淡反応の欠落、⑦DW傾向や混交反応に近い反応であるが、過剰な意味づけはなされない、などが挙げられている⁷。この中で、Kの反応が該当するのは⑤固執傾向だけであった。⑥濃淡反応については、一般によく見られるVIIカードには出現しなかったが、VIカードには出現しており、副反応も4個存在している。⑦過剰な意味づけがないという特徴については、Kは反対の傾向を持つと考えられる。前述したIIカードにおけるストーリーの積み上げは、むしろ過剰な意味づけに近いものである。「ストーリーをうまく作れないのが発達障害、ストーリーが見えるのは境界性パーソナリティ」⁸という宮内らによる指摘があるが、そう考えると、むしろ後者のほうがKの特性に近い。

量的分析においても、Kの反応は少なくとも高機能広汎性発達障害とはほとんど一致しなかった。

3) ロールシャッハ・テストにおける質的分析の照合

明翫らの研究によると、高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応は、精神病圏と弁別できない恐れがあるほどに修正BRSが低く、形態水準の低い反応が多い。これは、状況の細部に強く引き付けられ、全体という状況や文脈の中での理解が難しい特質のためと推測される⁹。

兼城らは、自閉症スペクトラム障害においては、知的能力の高さが必ずしも情報の統合や媒介機能の良さに関連しないことを見出した。ASDの児童は、中枢性統合の障害から情報を関連づけてまとめることが苦手で、局所に焦点づけた認知を行うという特徴を持っているためと考えられ、知的能力の高いASD児童でも実生活で情報をまとめる力の弱さがみられる¹⁰と報告している。

Kの反応は、こうした特徴とは一致していない。

他方、情緒的反応に関して、Kは外的統制が弱く ($FC < CF + C$)、感情のコントロールを失って自己中心的な行動を起こす傾向や、感情が統合できずに知性化の防衛を使う傾向 (F/C , FK) がみられた。これらは鈴木らの研究で示された広汎性発達障害の特徴と共通している点である¹¹。

前出の兼城らの研究では、自閉症スペクトラム障害の児童は言語能力が高いほど情報処理が複雑になるが、思考の混乱や損傷反応（いわゆるズタズタ反応）がみられた。その理由は、彼らは対人接触が多いが不適切な行動をとりやすく、同級生から拒絶されるなどの傷つきで二次障害を併発しやすい。こうした情緒的傷つき体験が損傷反応などに反映されているのだろうと推測されている。

Kの情緒統制の弱さや感情統合の不十分さは、もともとアスペルガー症候群にみられる風変わりな不適切な対人行動特徴を持っていたためなのか、あるいは、虐待的な家庭環境で傷つき体験を繰り返した結果アスペルガー症候群と同じような反応を示すようになったのかは不明である。

4) PFスタディの反応による照合

PFスタディによる反応特徴の研究は、ロールシャッハ・テストやWAISに比べると数が少ないようである。しかし、欲求不満場面における攻撃の方向が自他のどちらに向かうかといった内的な動向や、言動面で感情を抑圧した反応を見せるか、直接的な表現をするか、問題解決を優先した行動をとるかといった外的行動傾向を把握することは、被験者の見えにくい人格側面を知る意味でも重要であろう。

満田らの研究では、広汎性発達障害群では評価不可能反応 (U反応) の出現率が高く、これは場面の読み取り自体に問題が発生しているため¹²と指摘している。長谷川らによると、成人の広汎性発達障害群では、U反応が2つ以上あった割合は73.3%で、U反応の平均は4.9個であった¹³。

KのU反応は1つで、広汎性発達障害群と特徴が一致するレベルとは言えないようである。

4. 考察

投影法（ロールシャッハテストとPFスタディ）による人格検査を用いた分析と照合の結果、Kの人格統合水準は高機能発達障害群とは異なるレベルにあり、反応特徴における発達障害群との共通点も少なかった。Kは発達障害ではなく、症状のよく似た別の病態を持つ人と考えるのが妥当であろう。では、別の病態とは何か。

Kは自分を「愛着障害だと思う」と言っていた。正しい名称は反応性愛着障害というが、これは生後5歳未満までに親やその代理となる人との愛着形成がもてず、人格形成の基盤における適切な人間関係をつくる能力が障害されるものである。杉山によると、生後まもなくから極端なネグレクトに置かれた子どもは抑制型が多く、ネグレクトに加え身体的な虐待や愛着形成が部分的な状態に置かれた子どもは脱抑制型が多い。そして、反応性愛着障害の抑制型は自閉症圏の発達障害に非常によく似ており、脱抑制型は非常に落ち着かず、多動であることが多く、ADHDによく似た臨床像を呈する¹⁴という。

一般的なADHDと、反応性愛着障害の脱抑制型の症状としてのADHD様との鑑別について、杉山は、最も大切な点として解離の有無を挙げている。些細なきっかけで激怒やパニックが生じ、大暴れするといった、いわゆる「切れる」現象は解離性の意識障害の存在を示している。また、多動の生じ方もADHD様にムラが目立ち、非常にハイテンションの状態と、不機嫌にふさぎこむ状態とが交代で見られることが少なくない¹⁵。

Kが語る幼少期の様態は、脱抑制型の反応性愛着障害の症状と一致する。「親もヒートアップするので、ある一点を超えたときに痙攣を起こしていた」という表現は、杉山のいう解離のスイッチングが起きていたのであろう。さらに「体を動かすのが辛く、自分でも面倒くさがつている」状態も、もう一つ別のタイミングで起きた解離であろうと考えられる。これは、外傷的出来事に遭遇した人の周トラウマ期に起こる解離¹⁶、すなわち無気力でぼうっとした気分のことで、体を動かすのもおっくうで、部屋の片隅で何もせず何時間も座っていたりする人も多い¹⁷。

児童精神科医のペリーは、ネグレクト等で愛情欠乏に陥った子どもは、極端な二つの身体反応を行き来するという。一つは警戒状態で、心拍数や血圧が上昇して活動性が高まり、極限に達すると怒りと悲憤に満ちた感情の大爆発となる。もう一つは解離状態で、心拍数や血圧が低下し、気持ちは内向し、外界をシャットアウトしていて、無気力でぼうっとした気分になる。愛情欠乏は緩和されないストレスの直撃であって、子どもはこれに対抗するための身体反応を呈する¹⁸のである。

大学に入ってからKは、希死念慮、自傷的行為、抑うつ状態、気分の波の大きさ、不眠、

慢性的な身体不調などを抱えていた。他者への不信感と、他者を攻撃したい(言い負かしたい)という衝動を交互に抱くこともあった。これらの症状群は、ハーマンのいう「複雑性PTSD」に該当する。複雑性PTSDとは、長期反復性外傷後の症候群のことで、児童期虐待の経験者や長期の捕囚生活経験者などに現れる複雑な症状像¹⁹である。それは、単一性の外傷後ストレス障害よりもより広い概念を必要とするもので、単回のトラウマによって生じるPTSDと、頻回のトラウマによって生じる複雑性PTSDとはまったく別物の病態である²⁰。

なおこの度、国際診断基準のICD-11に、新しく複雑性PTSDが加えられることになった。

ハーマンは、新しい診断名を提案することの意味について、「被害経験者とその心的困難は児童期の虐待的環境に起源があることを認識すれば、もはや困難を『自己』の生まれながらの欠陥のせいにする必要はなくなる。そうなれば、体験に新しい意味を生み出し、そして新しい、スティグマのない自己同一性に至る道が開かれる」という。そして、「この重症な障害の発症に至る道における児童期外傷の役割を理解すると」、「過去の事件に対する被害経験の情緒的反応が正当なものであり、その裏付けがあることを教え、しかし現在は適応的でないことを認識させる」ための治療へのヒントが得られ、治療同盟の基礎ができると記している。

Kは複雑性PTSDという言葉を知らずに卒業した。けれども、愛着障害という言葉ヒントに、在学中から、自身の児童期に起きた悲しい出来事の数々を想起し、両親への怒りや、幼いころの自分への憐憫、辛い時代を生き抜いてきた自分に徹底的に向き合った。この苦しい作業を通して、過去のトラウマを克服する努力を卒業の直前まで続けた。症状としては苦しそうであったが、病態は軽くなったように見え、次第にアスペルガーらしい認知特徴や行動傾向がみられなくなった。

まとめ

児童期虐待経験者の中には、トラウマ反応に気づかれずに発達障害の診断のみを受ける者がいる。症状によって評価される診断基準では、その人のもつ能力やレジリエンスを発見できず、その人の生まれながらに持つ中枢神経の障害のせいで、数々の不適応行動が起こっていると判断されることも多い。

Kはその一例であったのだろう。Kは高い言語能力と平均以上と推測される知能を持ち、自己の内面に向き合う心的エネルギーがあったので、自分の中の「発達障害」への違和感に気づき、アスペルガー症候群というレッテルから脱出して、自己アイデンティティの再構築に向かうことができた。

Kと同じような環境で育ち、Kと同じような症状を示して発達障害の診断を下され、トラウマのケアが置き去りにされる例は、今後も増えていく可能性がある。発達障害と虐待経験等に

よるトラウマ反応は、併存している例も多く、より複雑化・深刻化することも多い。子どもの年齢が低ければ低いほど、発達障害とトラウマ反応の鑑別は困難であろうし、発見が遅れると改善・回復がより困難になっていくという問題もある。両者の鑑別のために重要なポイントを収集してアセスメントに活用し、その人のもつ能力や特性を生かした支援方法を見つけられるよう、今後の研究を進めていきたい。

謝辞

本研究のために相談記録や検査記録の開示に同意し、全面的に協力をしてくださったKさんに心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

追補

本研究は、郡山女子大学 ヒト(動物)を対象とする研究に関する倫理委員会の「ヒトを対象とした研究に関する倫理審査」により研究の実施を承認されたものである。(承認番号 ヒト倫-201908)

文献

- 1 杉山登志郎, 「発達障害とトラウマ 総論」, 発達障害医学の進歩, No.28, 診断と治療社, pp.1-14, 2016
- 2 杉山登志郎, 「講座 子ども虐待への新たなケア」, 明昌堂, pp.6-19, 2013
- 3 杉山登志郎, 「子ども虐待という第四の発達障害」, 学習研究社, pp.16-19, 2007
- 4 片口安史, 「改訂 新・心理診断法 ロールシャッハ・テストの解説と研究」, 金子書房, 1987
- 5 ローゼンツァイク, 「改訂版PFスタディ 絵画欲求不満テスト 使用手引き」, 三京房, 昭和39年
- 6 辻井正次, 内田裕之, 「高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応(1) 量的分析を中心に」, Journal of the Japanese Society for the Rorschach Projective Methods, Vol.3, pp.12-23, 1999
- 7 明翫光宣, 「高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応」, 中央大学心理学研究科・心理学部紀要, 第4巻, 第2号, pp.109-117, 2005
- 8 宮内等, 内山登紀夫, 「大人の発達障害ってそういうことだったのか」, 医学書院, 2013
- 9 明翫光宣, 辻井正次, 「高機能広汎性発達障害と統合失調症におけるロールシャッハ反応の特徴—反応様式の質的検討—」, Journal of the Japanese Society for the Rorschach Projective Methods, Vol.1, pp.1-12, 2007
- 10 兼城賢志, 細貝由紀子ほか, 「自閉スペクトラム症をもつ日本人児童のロールシャッハ反応—認知機能との関連」, 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 第22巻, 第1号, pp.44-54, 2018
- 11 鈴木明子, 吉野真紀ほか, 「広汎性発達障害のロールシャッハ・テストにおける特徴—再検査を通

- して一], Journal of the Japanese Society for the Rorschach Projective Methods, Vol.4, pp.18-25, 2010
- 12 満田健人, 明翫光宜ほか, 「PFスタディ反応における広汎性発達障害児と定型発達児の比較研究」, 小児の精神と神経, 49(3), pp.221-230, 2009
 - 13 長谷川芙美, 小森憲治郎, 「成人期広汎性発達障害における心理アセスメントの特徴」, 日本心理学会大会発表論文集 75(0), 2EV043- 2EV043, 2011
 - 14 杉山登志郎, 「子ども虐待という第四の発達障害」, 学習研究社, pp.28-32, 2007
 - 15 Ibid, pp.76-82
 - 16 ベセル・A. ヴァン・デア・コルク, ラース・ウェイゼスほか, 「トラウマティック・ストレス—PTSDおよびトラウマ反応の臨床と研究のすべて」, 誠信書房, 2001
 - 17 堀琴美, 「心的外傷からの回復援助 —DVによる心的外傷と解離体験への理解—」, 札幌学院大学大学院修士論文, 2002
 - 18 ブルース・ペリー, マイア・サラヴィッツ, 「子どもの共感力を育てる」, 紀伊國屋書店, 2012
 - 19 ジュディス・ハーマン, 「心的外傷と回復」, みずず書房, pp.180-201, 1999
 - 20 森則夫, 杉山登志郎ほか, 「臨床家のためのDSM-5 虎の巻」, 日本評論社, pp.46-56, 2014